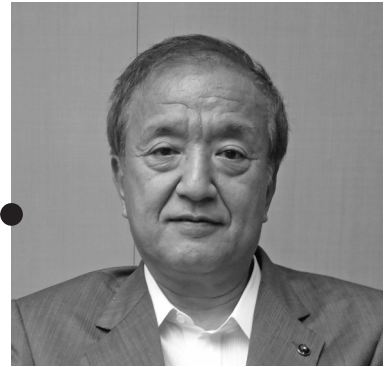


DEBUT 首長

東京都練馬区長 前川 耀男氏



まえかわ・あきお 1945年鹿児島県生まれ。東京大学法学部卒業後、71年東京都庁入庁。民政局、企画審議室、住宅局などを経て、2000年福祉局長。02年知事本局長。前区長の死去に伴う4月の区長選で初当選。趣味はジョギング、謡・仕舞など。68歳。

待機児童ゼロ、来年4月に実現 道路、地下鉄など交通基盤整備

練馬区 東京23区の西北部に位置する住宅・商業地区。人口約71万人と23区では2番目の規模を持つ。区内には大規模団地の「光が丘ニュータウン」がある一方、農地も多く残る。

——前区長の急死に伴う選挙の結果、区政のかじ取りを担うことになった。

美濃部都政の民政局を振り出しに2005年までの34年間、都庁職員として都の行政を担当してきた。企画審議室では都の長期計画づくりを担当し、その後臨海副都心の開発にも携わった。福祉局長時代には、認証保育所制度を創設した。こうした幅広い経験を区政に生かせると考えている。私自身、練馬区に住んで30年になる。生活者として地域の課題は肌身で感じている。

——選挙戦では少子・高齢化への対応を訴えた。

練馬区は23区では住民年齢が比較的若く、人口も増えている。中でも子育て支援は重点的に取り組む。区内には昨年4月段階で約580人の待機児童がいた。今年度は保育施設の定員を1300人分を増やし、来年4

月には待機児童ゼロを実現するのが目標だ。ただし、この問題を解決するには家庭や幼稚園も含め、すべての子どもたちを視野に入れる必要がある。民間の保育事業者への補助や都有地の貸し付けなどで参入を促進する一方、子育て家庭への支援策充実や小学生対象の放課後対策も進めたい。

一方で、これからは高齢化が急速に進展する。区内の医療機関、介護サービス、関係団体と連携しつつ、拠点となる高齢者施設の整備も進める。人口が増えている時にこそ、将来の課題に手を打ちたい。

——都市インフラの整備も急務だ。

インフラ整備は明らかに立ち遅れている。例えば都市計画道路の整備率は東京23区平均の約60%を下回っている。特に区の西部では20%にとどまる。世田谷区北部から当区に至る外環道の整備や、光が丘まで開通している都営大江戸線の延伸などの実現を目指す。

2020年の東京オリンピック開催は都全体ではインフラの整

備が進むと期待できる。ただそれが、都心部に集中しないかと懸念している。さらに人出不足、資材高騰などで、区の施設整備にマイナス影響が出る可能性もある。

——どんな体制で課題に取り組むのか。

6月に、それまで1人だった副区長を2人体制にし、新たに都の局長経験者を副区長に招いた。重要な課題・施策についてアドバイスする「参与」のポストを新設し、都庁と国土交通省のOBを招いた。いずれもトップマネジメントを強化するのが狙いだ。新しい区政の方向性を明確にするため、長期ビジョンの策定を進めている。年内には素案をまとめ、年度内には最終案を完成させる。

練馬区は公園や農地など豊かな緑と都市生活の利便性が両立しているのが魅力だ。この特性をさらに磨き、発展させたい。

(聞き手は主任研究員

田辺 省二)